
デス・ポーター

どうだ、明るいだらう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デス・ボーダー

【Nコード】

N4412BA

【作者名】

どうだ、明るいだろう

【あらすじ】

物心ついた頃には、世界に存在するあらゆる物の死期が近づくとその死期が分かるようになった少年、伊那和也。そんな少年の死と生を巡る日常と非日常を描く物語。

『僕らはそんな愚かな生き物だ』

ひよんなことから、自分いつかは死ぬ事が分かったとしよう。分かったとしても、いつか、の事だ。

普通の人なら、そんな先のことを、と一笑に付すことだろう。僕だってそうだった。でも、いつかとはそんな遠い未来の事ではないのかもしれない。

それがもしかしたら一ヶ月後だったらどうする。

何で自分が死ななければならぬのだ、と運命を呪うだろうか。

無様にあがくだろうか。

恐らく、そうだろう。

然る後に、言葉を弄して自分を諦めさせようと躍起になったりするだろう。

挙げ句の果てには、世界はこんなに素晴らしいものだったのか、と、そんなことを今更のように言葉にするのだろう。

死を意識して初めて、生を知る。

僕らはそんな愚かな生き物だ。

『全てお前のものであるんだ』

物心ついた頃には、世界に存在するあらゆる物の壊れる時が分かるようになっていた。

そのあらゆる物とは人間も含まれており、つまるところ、人の死期も分かるのだ。

しかし、それには条件があつて、壊れる時が近づかないことには、その時がいつやってくるか分からないのだ。

例えばの話だが、家の花瓶が壊れるとしよう。僕はその花瓶が壊れる事を、おおよそ一ヶ月前から分かるようになるのだ。

おおよそ一ヶ月前と言うのは、死期が近づくことしか分からないということなのだ。

それが重要な点で、決して、その死期を明確に知る事はできない。僕はこの力に気づいたとき、戦慄した。物が壊れる時期が分かる程度なら、物の損耗率が分かる、ちよつとした能力で済ますことができました。でも、人の死期だ。

それは幼かった僕には重すぎる事実だった。道を行き交う人を見ているだけで、死期が迫っている人が分かるのだ。恐ろしいなんてものではない。そんな感情で許容できる範囲を超えていた。

僕は人の死期が分からないように家に籠った。家族にも会わないようにした。家族と言つても人間。道を行き交う人のように死期が近づいている事が分かつてしまったとき、僕は耐えられないと思つたのだ。僕が壊れてしまふ、と。

そんな僕がこの力と向き合えるようにしてくれたのが、父親だった。

父親は、僕にこんな話をしてくれた。それは、母親が亡くなる一ヶ月前の事だったと言う。そう。僕の母親は早くに亡くなっている。それは出産による死ではない。物心つく前、僕が三歳だった頃の話だ。

僕はしきりに母親から離れようとしなかったそうだと。母親が僕に何で離れないのかと聞いたとき、言ったそうだと。

『ママ、死んじやだよ』

始めは母親も父親も僕の事を諫めたそうだと。でもしつこく、僕は言ったそうだと。母親は死ぬ、と。

それは父親にとつてとても恐ろしい予言だったそうだと。信じられなかったそうだと。一ヶ月後に、確かに母親は車に轢かれて亡くなったとき、僕を死神かとも思い憎んだそうだと。

でも、後から父親は思い直したそうだと。僕を憎んで何になると。母親はそんなことを望むような人ではなかったのだ。

あの時の息子の予言を聞いておけば良かった。もう一度、息子が死の予言を告げる事があるなら、信じようと決めたのだ。

だから、僕がこの力を自覚することができるのなら、自由に扱えるのなら、必ず私の死期を教えてほしい、そう父親は言った。

僕は死ぬのが怖くないのか、そう聞いた。

父親は言った。当時の僕には難しくてよく分からなかったが、その想いは伝わった。

『死ぬのが怖くない人なんているか。でもな、死を知る事で本当の生を全う出来るんだ』

僕はその言葉に決意した。この力を人の為に使おうと。そして、僕は無謀な日々を身を投じることになった。

まず、僕は人の死を覆そうとしたのだ。でも、それは並大抵の事でも覆せないことが分かった。死期は運命と一緒なのだ。

次に、死期を遅れさせる事ができないかと奮闘した。これも無駄だった。死期が運命と一緒だということに早くに気づいていれば、こんな無意味なことはしなかったと今なら思う。

僕は幾度もこれらのことに挑戦したのだ。その都度、色んな想いを体験した。

死期が近づいている事を直接伝える事もあった。その度に気持ち悪がられ、実際に人が亡くなると、お前は死神だ、と罵られたりも

した。その度に傷ついた。

中には、父親と同じように、僕の言う事を聞いておけばよかったと、後悔する人もいた。その度にも、僕は傷ついた。

僕の心が満身創痍になった頃、僕はこの死期が近づくという事実
に抗うことを止めた。気がついた時には小学五年生になっていた。
友達はいなかった。不気味な活動をしている子どもだったのだ。親
達も子どもを僕に近づけようとしなかった。

中学の間は独りぼっちで、学校に通った。中学時代は、酷い時代
だった。

クラスに一人、死期が迫っている子どもがいたのだ。僕はクラス
メイトとして何かできないか、そんな事を性懲りも無く考えたのだ。
それまでの経験上、おおよそ一ヶ月しかないと分かっていた。
いかに自分の評判をこれ以上下げずにクラスメイトに死期が迫って
いる事を伝えるか。それを考えて考えて、無様にあがく事もできず
に、僕はクラスメイトを亡くした。

僕は、その時、なんとも思っていなかった。とうとう死んでしま
ったか。そんなことを考えていたと思う。僕は人の死に触れすぎた
のだ。

僕が家で表情を変えることなくクラスメイトが亡くなった事を告
げたとき、父親は僕を殴った。

父親は僕を怒った。こう言ったのを覚えている。

『どんな死も、誰の死も、全てお前のものでもあるんだ！』

僕はもう死と無関係でいられるような存在ではなかった。それを
知った中学時代だった。

でも、今思えば、父親のこの言葉はそういう意味ではなかったと
思う。死と無関係でいられる存在等、この世には存在しないのだ。
だから、どつという意味か、今も分かりかねている。意味がないとは
思わない。

父親はいつだって正しかった。

だから、僕は高校三年生になった今でも、この言葉の意味を探し

ている。

まだ、懲りずに沢山の死と触れ合いながら、僕は死と言うものを
知ろうとしている。

『最高の死を迎えられるのでしょうか』

僕は一週間前ほどから、一人の人間を眺めていた。

彼の名前は和津大地。一見、中年ぐらいの歳に見えるが、実際はもつと若い。毎日、くたびれたスーツを着て、どこにであるような中小企業の会社に通っている。

僕が彼を眺めている理由は一つ。彼の死期が迫っている、ということだけだ。

恐らく、あと三週間ほどで、彼は倒れるのだろう。心臓発作だったり、脳溢血だったり、不慮の事故だったり、もしくは自殺もあり得る。

僕の勘では、彼は自殺するだろう。彼の疲弊しきった表情からそんな気がするのだ。

この三週間のうちに、彼は自殺を決意するだろう。それを止める術はない。

「あの、すみません」

僕は肩を飛び上がらせて驚いた。

場所は、和津大地の働く会社前のベンチ。そこで、見知らぬ女性に声をかけられた。

「何ですか」

やましいことはしていないので、堂々と答える。人の死に様を観察しようとしているのだから、ある意味、やましいことではあるのだが。

「私の夫を付け回しているようですが、何が目的ですか」

私の夫。その言葉に、この女性が和津大地の妻だと言う事が分かる。随分と綺麗な若奥様といった感じだった。恐らく、和津大地も年相応の姿をしていたら、若旦那と言ったかんじなのだろう。

「何も目的はないですよ。人間観察が趣味なだけです」

全く答えになっていないような気がする。というか自分でも思う

が、嘘くさい。

「嘘ですよ。あなた、三波音町で一時期、噂になった子よね」

「どうやら、この女性は僕の小学生の間の独善的活動を知っているようだ。なら、大体察しているのかもしれない。」

僕は黙った。

すると、女性が口を開く。

「私の夫は死ぬんですか」

この女性は察している。きっと、信じてはいないだろうけれど。

今回のように、僕を知って関わってくる人はいる。しかし、皆が僕の力を信じていない。むしろ、気味が悪い少年、そう結論づけて満足そうに去っていく。

この和津大地の奥さんも同じだろう。

「死ぬと言ったらあなたはどうするんですか。信じられるんですか」

僕は、どうせ理解されないのだ、と高を括り嘲るように答えた。

女性は複雑そうな表情を浮かべて、僕の隣に座った。

「信じられませんよ。信じたくもありません。自分の愛する人が死ぬなんて……想像もしたくありません」

「そうですか。でも、あなたは信じていないようには見えない」

女性の表情に影が差していた。その表情は絶望している人間のそれと似ていた。まるで、愛する者を亡くした時のような表情だった。大事な人を亡くした時は、人は様々な表情を見せる。涙を見せたり、悔しそうにしたり。彼女の表情はその一つだったのだ。

「あなたの噂には十中八九、人の死が関わっています。それはあなたが、死神だからなんでしょう」

死神か。むしろ死に群がるハイエナと言った方が正鵠を得ているような気がするが、周りには死神に見えるらしい。

「申し訳ないですけど、僕は死神じゃないんですよ。むしろ、死の予言者と言った方が正しいと思います。」

「死の予言者。じゃあ、あなたは人の死が分かるとでも言うのですか」

「そうです」

珍しく話を通じる相手だ。僕はそんな風に思った。いつもなら、話を途中で折られて、お前が死神なのに代わりはない、とそう怒りだすのだ。死が迫っている事を他人のせいになければ、人はやってられない。人間とは、そこまでして死と言うものから逃れようとする。

いや、人は死を見ないようにしているのだ。死とはタブーなのだ。

「私の夫はいつ死ぬんですか」

「恐らく、三週間ほどでしょうね」

「どうすれば、夫を死から救えるんでしょうか」

「それは……どういう意味ですか」

僕は彼女の言葉の意味を分かりかねた。死ぬという運命から救うことなど、できない。僕はわずかな希望でも粉碎しなければならぬのか。

僕は久しぶりに胸が痛んだ。いつそ、怒鳴り散らして僕を否定してくれた方がまだ良かった。死を見ずに、僕を責める事で楽になるのなら、それでも良かったのかもしれない。

「どういう意味ありません」

やはり、死から救う術を知りたがっているのか。そう、嘆息しそうになったときだった。

「どうすれば、夫にとって最高の死を迎えられるのでしょうか」

「それは……」

ありそうで今までなかった答えだった。僕は言葉に窮してしまっ

た。僕はそんな考えで、人の死を見た事がなかった。死期が分かるのなら、最高の終わりを演出するのが、救いというものなのかもしれない。

「それは、あなたが一番分かっていると思います。あなたが一番、夫のことを分かっているのですから」

最高の終わりを演出すること、それは誰にでもできるわけではな

い。これは人の死に触れ続けた僕だから言える、そんな言葉ではない。僕には全く、その最高の終わりというものが分からないのだ。ましてや、和津大地の最高の終わりなど、分かるのは人生を共に歩んできた伴侶ぐらいだろう。

「分かりました。あなたとの出会いが、良き巡り会わせだったと思えますように」

「ええ。僕はあなた方を見守っています。ですから、困った時はいつでも頼ってください」

「そうさせてもらいます」

女性はそう言うと、夫のいる会社に入ってしまった。一体、この後、どんな話をするのか興味がないでもないが、これ以上は人道的にどうかと思う。やはり、僕はハイエナの方が似合っている。

そろそろ、学校に向かうでしょう。朝のホームルームには間に合わないが、一時間目には間に合うだろう。

少し話し込んでしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4412ba/>

デス・ボーダー

2012年1月12日23時57分発行